TL1146

東チモールの青年グループの報告に基づく

東チモールの人権侵害に関する報告

１９９０年９月～１２月

A Report on Human Rights Violations in East Timor

based on reports of an East Timorese youth group

September-December 1990

編集・翻訳　東チモールに自由を！全国協議会

Free East Timor Japan Coalition

１９９１年３月発行

March 1991

東チモールに自由を！全国協議会

（お近くのグループにご連絡ください。）

■東チモールの独立を望む会
〒０６０　札幌市中央区北１条西９丁目　北海道ビジネスビル４Ｆ
tel.　011-261-2801

■仙台東チモールの会
〒９８０－０１　仙台市青葉区一番町１丁目仙台中央郵便局私書箱５６９号
tel.　022-288-9186（羽倉）

■東京東チモール協会
〒１８０　武蔵野市中町１－２－９－３０２
tel.　0422-55-7937

■名古屋ＹＷＣＡ東チモールを考える会
〒４６０　名古屋市中区新栄町２－３
tel.　052-961-7707

■名古屋カトリック正義と平和委員会
〒４６１　名古屋市東区葵２－６－２９　福信館
tel.　052-931-7374

■東チモールの独立に連帯する会
〒６０６　京都市左京区吉田下安達町９　きょうと・市民のネットワーク気付
tel.　06-370-8304

■善通寺東チモールと連帯する会
〒７６５　善通寺市文京町３－２－１　四国学院大学宗教部筒井洋一郎気付

■東チモールの声を聞く会
〒７００　岡山市下伊福１丁目２－２８　松尾充芳方
tel.　0862-54-8150

■呉ＹＷＣＡ東チモール問題を考える会
〒７３７　呉市幸町３－１
tel.　0823-21-2414

■下関・東チモールの会
〒７５０　下関市丸山町５－３－２５　下関労働教育センター気付
tel.　0832-23-4585

●私たちの主な活動

情報の収集・提供、日本政府・インドネシア政府・ポルトガル政府・国連などへの働きかけ、写真展・ビデオ・スライド会・講演会、東チモール人を呼んでの全国ツアー、東チモール人学校支援基金、東チモール支援ワイン頒布、抗議行動（デモ、はがきキャンペーン等）、世界中の東チモール支援団体との連絡。

目　次

(ページ)

この報告書の概要、９月～１２月の東チモールの一般的状況 ---------- 1

第１章　ディリ、マナトゥト、リキサにおける９－１２月の拘束・拷問・失踪 ---------- 2

第２章　1月１７、１８、１９日のデモ、および１０月１２日のデモに参加し、インドネシア軍の迫害を受けていて、そのため現在身をかくしている者たち ---------- 6

第３章　１１月１日から１２月６日まで、マナトゥトの司祭宅に避難して身をかくしていた若者たち ---------- 7

第４章　バウカウ県でインドネシア軍に疑われ、迫害を受けている者たち ---------- 8

第５章　「微笑作戦」によって捕えられた東チモール人ゲリラ兵 ------- 8

第６章　１０月１５日のデモとその直後のインドネシア軍による人権侵害 ---------- 8

第７章　１２月のボボナロにおける人権侵害 ---------- １０

第８章　捕えられた者たちの証言 ---------- １２

第９章　９、１０月のディリの状況 ---------- １５

この報告書の概要

この報告書は、１９９１年１月に「東チモールに自由を！全国協議会」が入手した東チモールの若者の地下抵抗組織の一群の報告の要約である。この地下抵抗組織は「東チモール地下戦線執行委員会」と自らを呼んでいる。青年グループの報告は４９ページからなり、１９９０年９月から１２月までの東チモールでの状況、人権侵害の事例について、ポルトガル語、英語、インドネシア語をつかって詳しく記述している。

同報告の前書きによると、ここに記録された人権侵害は全体の一部であって、まだ報告されていない例も多々あるものと思われる。

東チモールに自由を！全国協議会は、これが占領下にある東チモールの日常的な人権侵害および軍、秘密警察による住民の迫害、弾圧の実態を克明に綴っている重要な資料であることから、要約という形で翻訳、出版することにした。

９月～１２月の東チモールの一般的状況

９月４日、ディリ教区５０周年記念のミサが行われ、そのとき１万５千人いた参加者の中から若者たちが独立を要求するデモを展開した。１０月にはいって中学校と軍との衝突があったりして、緊張が高まっている。ディリ市内は夜８時以降実質的に戒厳令が敷かれたような状況にあり、秘密警察による市民、とりわけ独立運動家たちに対するテロが頻発している。またインドネシア軍は抵抗派のゲリラ軍を掃討するための作戦を９月はじめから展開している。

インドネシア軍および秘密警察の若者たちに対する暴力には一定のパターンが見られる。活動をしている若者たちは、夜秘密警察の訪問を受けて、その場で乱暴を受けたりしたのち、警察に移され、拷問と尋問を受けるというような場合が多い。拷問は、殴る、蹴る、銃床でなぐる、たばこの火をおしつける、電気ショック、手足をしばって独房に入れるというものが多い。殺される場合もあるらしい。若者たちは一旦逮捕されると釈放されるときに秘密警察を手伝うよう強制されたりする。若者たちに対する弾圧はますます強化されており、将来、またデモが発生したなら、情容赦なく殺されたりする可能性があるだろう。

第１章　ディリ、マナトゥト、リキサにおける９－１２月の拘束・拷問・失踪

（１）ディリ市およびその周辺地域において９月から１２月はじめまでの間に、インドネシア軍によって捕えられ、拷問を受けた者は次のとおりである。なお、中には失踪し行方不明の者もいる。日付順に記載する。

９月４日

Vicente Paulo Madeira　サン・ジョゼ校生徒。行方不明。

Francisco Nascimento　２０歳。逮捕される。（第８章　証言の３を参照。）

９月６日

Aleixo Gama　２３歳。ラガ生まれ。ディリ在住。サン・ジョゼ校生徒。

９月１０日

Vicente Moniz　２２歳。マナトゥト生まれ。ディリ在住。サン・ジョゼ校生徒。

９月１６日

Antalino Beltrão　２１歳。ビダウ在住。サント・パウロスＶＩ中学校事件のあと失踪した。

９月１９日

Felismino Soares　マタドウロ在住。夜中に拘束される。（または２０日）

Julião Marçal Martins　２１歳。マタドウロ在住。ダルマ・バクティ高校生徒。

９月２０日

Julia Marçal Martins　朝つかまる。

Evangelino Ximenes　１９歳。ロスパロス生まれ。マタドウロ第一国立高校生徒。

Maukuarta　１５歳。肉売り。キンタル・キック在住。「スカウト広場」で夜ひどく打たれる。

９月２６日

Paulo Maia　３０歳。マリアナ生まれ。「スーペルマス」社の運転手。ディリ在住。

João Paulo Marcos　「スーペルマス」社の従業員。ディリ在住。

９月２７日

Boby Xavier Luis Pereira　１６歳。マタドウロ第三国立中学校生徒。マタドウロ在住。（第８章　証言の２を参照。）

João Braz da Costa　１８歳。マタドウロ第一国立高校生徒。

Jose Maria

Feliz Campos

Mariano Miranda

Alexandre dos Santos

１０月１５日

Silvino Gurado　サメ生まれ。タイベッシ在住。

Carlito　２４歳。農民。サメ生まれ。タイベッシ在住。１９９１年１月の時点でまだディリのＳＧＩ（Senopati II）に投獄されている。

１０月１６日

Manuel Alves Correia　ディリ工業高校生徒。

Abel　ディリ工業高校生徒。

João　ディリ工業高校生徒。

Ernesto　ディリ工業高校生徒。

この４人はみな西ディリのマスカレニャスの住民であるが、ホテル・トゥーリスモの前の海のそばですわっていたとき、インドネシア軍に捕えられた。

Silvino Gurado da Costa　２０歳。逮捕される。

１０月１７日

Francisco　生徒。ディリ生まれ。ヴィラ・ヴェルデ在住。

Rui Neves Reis　生徒。ディリ生まれ。コモロ在住。

Benedito Cesario Guterres　生徒。ディリ生まれ。ディリ在住。

Davida da Conceiçao　２３歳。逮捕される。１９９１年１月の時点でまだディリのＳＧＩ（Sinopati II）に投獄されている。

Talufo Moniz Alin　２４歳。拷問のため障害者となる。

１０月１８日

Avi　ディリのアイカディル・フム在住。

Nelson do Rego　生徒。ディリ在住。

Florencio Martins do Rego　生徒。タイベッシ在住。

Claudia Boavida　２５歳。モタエル教区で働いている。バイロ・フォルモサ在住。家にいるところをレッド・ベレー部隊に捕えられる。クパン（西チモール）に連れ去られ、頭皮をはがれたとの情報がある。

１０月１３日

Guilherme　生徒。ディリ在住。

Egidio　生徒。ディリ在住。

この日はまた別なチモール人少女が２人インドネシア軍に捕えられたが、名前や身分はわからない。

１０月１７日

Davida da Conceiçao　２３歳。１９９１年１月の時点でまだディリのＳＧＩ（Senopati II）に投獄されている。

１０月１９日

Aquiles Correia　２２歳。逮捕される。

１０月２６日

Rui Belo　ディリ国立教員養成学校生徒。ディリ在住。

Carlos Vicente　ディリ国立教員養成学校生徒。ディリ在住。

１０月２８日

Jose dos Santos　バウカウのファトゥマカ国立高校。ファトゥマカ在住。この日の午後、ファトゥマカの学校のグラウンドでサッカーをしていたとき、インドネシア軍によって他の友達たちと一緒に捕えられた。

Benigno Soares da Silva　２０歳。逮捕される。

Calistro Gudnho　１９７３年7月２３日、エルメラ生まれ。ファトゥハダ第四中学校生徒。逮捕される。（第８章　証言の４を参照。）

１１月１日

Abilio Mesquita(Mabili)　２３歳。サン・ジョゼ校生徒。サンタ・クルズ在住。この日の夜８時ごろ、彼の家が６０人ぐらいの武器をもった兵隊に囲まれたため、自ら投降した。激しく殴打されたあと県軍司令部に連れていかれた。翌日の朝、親戚が県軍司令部に会いに行ったがそこに彼はもういなかった。現在まで居場所はわからない。この青年は、ディリの路上でインドネシア兵をなぐったという理由で、この間何回かインドネシア軍の迫害を受けていた。彼がインドネシア兵をなぐった理由は、父と兄弟たちが１９７８年森からおりてきた（投降した）とき、インドネシア軍に殺されてしまったからである。拷問のため顎の骨を折られた。

João　３０歳。ディリのカイコリ在住。インドネシアの秘密警察（表面上は警察の服を着ていた）によって夜捕えられ、殴打された。尋問を受ける前にトイレとして使われている汚水の溝の中に入れられた。

１１月３日

Domingos Pereira　１９６７年１２月１５日、ロスパロス生まれ。マタドウロにあるディリ国立第二高校生徒。ディリ在住のAfonso PereiraとAna Pereiraの息子。（第８章　証言の１を参照。）

１１月８日

Jose Manuel da Silva Fernandes　２４歳。ディリの地方軍司令部（Korem）の司令官と会って帰る途中失踪した。

１１月１０日

Horacio da Costa　３２歳。カイコリ在住。行方不明。

１１月１３日

Jose Antonio Galucho Joaquim　１９５９年5月２５日生まれ。公務員。ディリのヴィラ・ヴェルデ在住。１９９１年1月の時点でまだディリのＳＧＩ（Sinopati II）に投獄されている。

Noe da Silva Ximenes　１９６９年１１月９日、バウカウ生まれ。サン・ジョゼ校生徒。ディリのカメア在住。Marçal CelestinoとCarmelinda da Costa Silvaの息子。１９９０年１２月１０日に釈放されたが、現在までインドネシア軍による迫害が続いている。毎週警察に出頭報告しなければならない。

１１月１８日

Aleixo da Silva Gama　バウカウ県ラガ生まれ。２２歳。（または２３歳？）サン・ジョゼ校生徒。ディリのビダウ／サンタナ在住。１９９０年9月６日に

釈放されたとき、インドネシア軍は、地下活動をしている若者を殺すよう命令した。そして彼にその報酬として２００万ルピアを保証した。しかし彼はそれを拒否した。１９９１年1月の時点でまだディリのＳＧＩ（Senopati II）に投獄されている。

１１月２７日

Calistro Gudinho　１７歳。逮捕される。

１２月１０日

Domingos Pereira　２３歳。逮捕される。

（2）１１月２日、マナトゥトでは次の若者たちが捕えられ拷問を受けて、ディリに移送された。その後現在に至るまで行方不明である。

Mario Nicolau Soares　バウカウ生まれ。マナトゥト在住。マナトゥトの県軍司令部（Kodim）勤務。

Vicente Xeniz　２２歳。マナトゥト生まれ。ディリ在住。サン・ジョゼ校生徒。１９９０年9月１０日、若者活動家たちの居場所を調べて当局に通報するという条件で一旦釈放された。しかし彼はその仕事を拒否し、インドネシア軍の追及の手をのがれてマナトゥトに身をかくしていたが、マナトゥトの県軍司令部のDomingos Apai指揮下の部隊に、マナトゥトの市場の「ビス・ラリス３３３」で捕えられた。（注記：「ビス・ラリス３３３」の意味は不明だが、バスに関係した何かであろう。）

Victor Viegas　マナトゥト生まれ。マナトゥト在住。生徒。

（3）１１月の半ば、リキサでは次の若者たちが捕えられディリに移送され拷問を受けたのち、１２月１０日に釈放された。

Benedito de Sousa Lay　リキサ生まれ。リキサ県ダト村在住。

Vicente dos Santos　リキサ生まれ。リキサ県ダト村在住。

Jorge Ximenes　リキサ生まれ。リキサ県ダト村在住。

（4）また１１月、リキサ県では９６名の住民が尋問、拷問を受け、そのうち６名が１１日、１２日にかけ逮捕、投獄された。以下はその６名である。

１１月１１日

Filomeno de Oliveira　３６歳。（すでに１２月１０日に釈放された）

Vicente Leco　４０歳。

１１月１２日

Edmundo Jordão　３４歳。

Grigorio dos Santos　３７歳。

Amadeu dos Santos　３７歳。

Carlito　２６歳。

（5）１１月２２日、アイレウでは次の者たちが逮捕された。

Fernando Mendonça　２１歳。逮捕の理由はいつもラジオ・オーストラリアを聞いているということであった。

Marçal dos Santos　２８歳。同上の理由。

第2章　1月17、18、19日のデモ、および10月12日のデモに参加し、インドネシア軍の迫害を受けていて、そのため現在身をかくしている者たち

Melquiades de Jesus Alves　１９６８年１２月２０日、ヴィケケ生まれ。ディリのサン・ジョゼ校生徒。サンタ・クルズ在住。Herminio de Jesus AlvesとGuilhermina de Jesus Alvesの息子。

Augustu Mau Siri　１９６６年6月１７日、ディリ生まれ。サン・ジョゼ校生徒。クル・フム在住。Mau SiriとClotilde Monizの息子。

Emilio Pereira　１９６６年１１月１１日、アイナロ生まれ。ディリの私立中学校生徒。マタドウロ在住。Rafael PereiraとAguida da Conceição Pereiraの息子。

Estanislau Carceres　１９６７年6（?）月２７日、マナトゥト生まれ。ベコラにあるディリ国立第一高校生徒。バイロ・ピテ在住。Antonio CarceresとEngracia Carvalho Carceresの息子。

Marcelino Guterres Sequeira　１９６２年オッス生まれ。サン・ジョゼ校生徒。マタドウロ在住。Filomeno Sequeira de OliveiraとAna Maria Guterresの息子。

Simplicio Celestino de Deus　１９６２年9月２５日、アツァベ生まれ。サン・ジョゼ校生徒。アウディアン在住。Celestino de Deus とVirginia Soaresの息子。

Paulino Monteiro Soares Babo　１９６４年8月３１日、ディリ生まれ。バイロ・ピテ在住。（ＩＰＩの）大学生。Camilo BaboとRomana Soares Baboの息子。

Baptista Antonio Sequeira　１９７１年4月１３日、ディリ生まれ。高校生。ヴィラ・ヴェルデ在住。Antonio da CunhaとMaria Sequeiraの息子。

Jorge Manuel de Araujo Sereno　１９７０年１２月１日、アイレウ生まれ。サン・ジョゼ校生徒。ラハネ在住。Antonio Jorge SerenoとRegina da Conceição de Araujoの息子。

Vasco Gomes dos Santos　１９６７年9月３０日、アツァベ生まれ。高校生。バイロ・ピテ在住。Filomeno GomesとGeralda de Deusの息子。

Nazario Tavares Maria　バウカウ生まれ。２５歳。カイバダ・マカサエ在住。
Augusto Tavares Maria　民間企業の社員。カイバダ・マカサエ在住。
Bonifacio Barreto　１９６９年８月１２日生まれ。高校生。マリアナ・リタボウ在住。Feliz da Silva BarretoとFeliciana Barretoの息子。
Marcos dos Santos　１９６５年１月５日、バリケ生まれ。マリアナ在住。
Domingos Barreto　１９７２年８月８日、カイラコ生まれ。中学生。マリアナ・リタボウ在住。Feliz da Silva BarretoとFeliciana Barretoの息子。
Joao da Costa Macario Faria da Silva　１９５９年８月２６日、ディリ生まれ。土木部の公務員。マナトゥト在住。Manuel Macario da SilvaとJoana Faria da Silvaの息子。
Nazario Magno　アイナロ生まれ。２４歳。高校生。ディリのシナ・ラテ在住。Cesar MagnoとGabriela de Limaの息子。
Jose Manuel da Silva Fernandes　サン・ジョゼ校生徒。ファトゥベルリウ生まれ。ラハネ在住。
Francisco (Chico Bobonaro)　ボボナロ生まれ。ディリのアウディアン在住。

第３章　１１月１日から１２月６日まで、マナトゥトの司祭宅に避難して身をかくしていた若者たち

マナトゥトの司祭宅に身をかくしていた若者たちは合計２１名いるはずであるが、名前がわかっているのは以下の１３名である。

Manuel Constantino Cornelio de Piedade　マナトゥト生まれ。マナトゥト、サウ村のヌフ・テネン在住。情報省職員。
Policarpo Amilcar Boavida　マナトゥト、アイテアス在住。
Cerilo Gomes　マナトゥト、マテ・ラテン在住。
Jeronimo　マナトゥト在住。
Salvador Soares　マナトゥト在住。
Jose Soares　マナトゥト、アイテアス在住。
Diogo　マナトゥト在住。
Maria Aguida do Rego Alves Piedade　マナトゥト、サウ村、ヌフ・テネン在住。
Domingos Soares Boavida　マナトゥト、アイテアス在住。
Madalena　マナトゥト、ヒバン・ラサ在住。
Deonisia Mota Guterres　マナトゥト、サラン・レン在住。
Mario Soares　マナトゥト、サウ・リドゥン在住。
Domingos Gomes　マナトゥト、マテ・ラテン在住。

第4章　バウカウ県でインドネシア軍に疑われ、迫害を受けている者たち

Alcino Ximenes　バウカウ県、スマラリ村在住。
Saturnino Ximenes　バウカウ県、スマラリ村在住。
Cancio Pereira　バウカウ県、トリロロ村在住。
Antonio Amaral　バウカウ県、バハリ村在住。
Felismino　バウカウ県、バハリ村在住。

第5章　「微笑作戦」によって捕えられた東チモール人ゲリラ兵

１９９０年１０月から１１月にかけて、インドネシア軍は、東チモール民族解放軍（ファリンティル）の司令官シャナナ・グスマオおよびその他の東チモール人ゲリラ兵を殺すか、あるいは生け捕りにするため、「微笑作戦」（Operasi Senyum, "Smile Operation"）という名の作戦を１２大隊をつかって展開した。この作戦は失敗し、多くのインドネシア兵が死んだ。その内１１人のインドネシア兵がディリの軍人墓地に埋葬された。ディリ以外で埋葬されたインドネシア兵もいるが、その数はわからない。

作戦が失敗した結果、失望したインドネシア軍は報復のため、現在疑わしい住民を大量逮捕する計画を立てている。

作戦によって死亡した東チモール人ゲリラ兵の数はわからないが、捕えられてインドネシア軍のもとに生存している次のようなゲリラ兵がいることがわかっている。

Luis Amaral　９月２７日、アイナロのソロにいるところを、ナンガラ（空艇部隊）によって捕えられた。
Domingos Pinto (Berlaku Lian Timur)　政治補佐。１０月６日、カブラキ地区でナンガラによって捕えられた。
Feliz　ファリンティル戦士。１０月７日、カブラキ地区でナンガラによって捕えられた。

第6章　１０月１５日のデモとその直後のインドネシア軍による人権侵害

１０月１５日、朝８時、ディリでインドネシアに反対するデモが「サン・パウロＶＩ」カトリック中学校の生徒たちによって行われた。その際、インドネシア軍はレッド・ベレー部隊、警察を派遣し、武器をもって生徒たちに向かわせた。生徒たちは素手であった。東チモールの自決権と独立の権利を訴えるというのがデモの主旨であった。

このデモの際、生徒たちは反インドネシアのスローガンを壁に書いた。「われわれ

サン・パウロＶＩカトリック中学校の生徒はパンチャシラに反対し、４５年憲法に反対だ」「東チモールは独立を望んでいる。しかしスハルトはまだ健在だ」「インドネシアは開発するために東チモールに来たのではない。それは破壊するためだ」「東チモールは共産主義ではない。インドネシアこそ共産主義だ」等。

武器をもったインドネシア軍に対して生徒たちは素手でたたかい、インドネシアの秘密警察（Nusra Bakti）のひとりのキャプテンを殺した。怪我人が数人でた。またピストルとラジオを奪った。バイク（ホンダＣＧ）に火を放った。

その結果インドネシア軍は大変プライドを傷つけられ、他の学校の生徒や家族にさまざまな報復を行った。

１０月１５日に拘束された者たちは以下の通りである。

Selvino Barreto　２０歳。ディリのタイベッシ在住。サン・ジョゼ校生徒。現在行方不明。

Bendito Soares　ディリのベモリ在住。土木部の公務員。家で捕えられ頭にこぶができる。行方不明。

Marcos Araujo da Costa Soares　高校生。行方不明。

Lito Vaz　ディリのベモリ在住。運転手。行方不明。

David da Costa Lay　２５歳。アイカディルフム在住。運転手。１０月１５日１１時にインドネシア軍に攻撃された。

Clementino Guterres　１０月１５日１１時に拘束された。

Ernesto Moniz　サン・パウロＶＩ中学校の生徒。マスカレニャス在住。行方不明。

Pedro Moniz　サン・パウロＶＩ中学校の生徒。マスカレニャス在住。行方不明。

Antonio Mendonça　アイレウ生まれ。

Alfonsius Nahak　アタンブア生まれ。ディリ在住。

Domingos　ディリ生まれ。アイカディルフム在住。農業。

Celestino Godinho　ボボナロ生まれ。ディリ在住。農業。

Ernesto Vicente Moniz　ベコラ商業高校２年生。ディリ生まれ。マスカレニャス在住。

Marcelino da Costa　ベコラ工業高校生徒。ディリ生まれ。マルカレニャス在住。

Rui Carvalho　ディリ第一中学校生徒。ディリ生まれ。マルカレニャス在住。

Antonio　農業。ディリ生まれ。トコバル在住。

Bendito Sarmento　アイナロ生まれ。ベモリ在住。土木部の公務員。

さらに１０月１６日に拘束・拷問され、または失踪した者たちは以下の通りである。

David da Coceição (Aleon)　２０歳。ディリのベモリ在住。午前１０時に拘束されKoopskam（治安作戦司令部）のランドローバーで連れ去られた。皮膚を

ナイフで切られ、頭を銃床でなぐられて気を失い、車に投げ込まれた。この青年は5回以上つかまった経験がある。

Clementino Guterres　ベモリ在住。行方不明。

Jose Amaral Tilman　２１歳。タイベッシ在住。ベコラ工業高校生徒。行方不明。

Jorge Soares　２３歳。タイベッシ在住。ベコラ工業高校生徒。現在まで行方不明。

Talofo Namboro Alin　２０歳。ディリ第一中学校卒業生。ヴィラ・ヴェルデ在住。２４時家にいるところを襲われ、背骨を折られ、ディリのウィラ・フサダ（Wira Husada）軍病院に入院。

Azis Soares　農業。ディリ生まれ。マタドウロ在住。

Carlos da Costa Ribeiro　農業。ディリ生まれ。マタドウロ在住。

Fernando　第四中学校生徒。ディリ生まれ。ヴィラ・ヴェルデ在住。

Gerson Assis Belo　２０歳。ディリ第一中学校生徒。ディリのヴィラ・ヴェルデ在住。１３時ごろ東チモール治安特別作戦司令部に捕えられ、くぎの打たれた板で殴打され、重傷。

１０月１７日の拘束、拷問、失踪は次の通りである。

Mario Orlando Neves　５０歳以上。コモロ在住。

João Bosco Hau　４０歳ぐらい。コモロ在住。東チモール州土木部の部長。午後2時ごろ家にいるところを襲われ、拷問を受けた。

João Paulo Li Hau　２０歳。ベコラ工業高校卒業生。

この3人はその日、家を１００人ほどのインドネシア兵に囲まれ、そんな状況の中で家のドアを開ける勇気がなく、結局インドネシア軍によって家は徹底的に破壊されてしまった。その上拷問を受けた。翌朝、彼らは血だらけのまま知事邸に言って訴え、正義をもとめたが、この事件に関する知事の立場はわからない。

Nelson Hemrique　サン・パウロスＶＩ中学校生徒。ディリ生まれ。バイロ・セントラル在住。

Nelson Lemos　サン・パウロスＶＩ中学校生徒。ディリ生まれ。トコバル在住。

第7章　１２月のボボナロにおける人権侵害

１９９０年１２月、ボボナロ県では第１６３６県軍司令部（Kodim 1636）によって次のような者たちが捕えられ、反インドネシアだとして追及された。

１２月７日

Mateus　マリアナ県勤務国家公務員。

Cipriano　３５歳。カイラコの教理問答師。

拘束されていた間、マリアナの県軍司令部の兵士によって殴打、たばこの火、電気ショックなどあらゆる拷問を受けた。マリアナの教区司祭、フランシスコ・タヴァレス師がその司令部に行ったが拒否された。

１２月１０日

Adão de Purificação　４５歳。マリアナ地方開発庁公務員。

Carlito de Purificação　３０歳。上記の者の弟。

このふたりは第１６３６県軍司令部によって捕えられたとき、モーゼル銃２丁、弾薬６０個、手りゅう弾２個、それにシャナナ・グスマオのメッセージの入ったカセット、東チモールの戦いの歌を入れた音楽カセットなどを押収された。その後殴打、たばこの火、電気ショックなどの拷問を受け、マリアナの警察の秘密監獄に手足をつながれて入れられている。

１２月１３日

Venceslau Viana do Carmo　３０歳。マリアナ県保健局公務員。

Marcos Soares de Jesus　３８歳。マリアナ県社会部公務員。

Acacio de Araujo　３９歳。公務員。

第１６３６県軍司令部によって捕えられたとき、旗一枚、シャナナのメッセージの入ったカセットや東チモールの戦いの歌の入ったカセット数個、闘争に関連する報告書、東チモール問題に関する外国の新聞の切り抜き、活動指令書などを押収された。刑務所では毎日殴打、たばこの火、電気ショックなどの拷問を受け、マリアナ第１６３６県軍司令部の秘密の監獄に手足をつながれている。

１２月１４日には、ディリからマリアナにヘリコプターがやってきた。それは先に押収された物品を調べるためＲＰＫＡＤ（陸軍精鋭連隊）を運んできたのだった。

さらに１２月１８日には、マリアナ第１６３６県軍司令部司令官がディリに赴いた。信頼できる筋の情報によると、これらの物品と捕えた者たちの処理についての指示を受けるためだったようである。捕えた者たちを法的措置の枠外で処理するよう（殺すようLiquidados）指示を受けた可能性がある。

１２月１７日

Olandino Guterres　３１歳。マリアナ生まれ。マリアナの警察官。巡査部長。

第１６３６県軍司令部に拘束されており、毎日殴打、たばこの火、電気ショックなどの拷問を受けている。

さらに信頼できる情報によると、第１６３６県軍司令部は４００人にものぼる反インドネシアと目される者たちを捜索中であり、そのうち４５人がまずもって捕えるべき者のリストにあがっている。追及を受けている４５人のうち、以下の者たちがわ

かっている。これらの者たちを捕える仕事は、マリアナの第１６３６県軍司令部によって直接指揮されている。

Lourenço dos Santos Gomes　マリアナ県畜産部公務員。
Manuel Eduardo　マリアナ県畜産部公務員で運転手。
Saul　マリアナ土木部公務員。
Acacio Monteiro　リタボウ村の村長。
Alberto Soares　マリアナ県食用作物部公務員。
Manuel Magalhães　マリアナ県土木部部長
Alfredo Noronha　マリアナ県教育文化部公務員。
Jaime Tilman　マリアナの学校長。
Cipriano Amaral　マリアナ県公務員。
Lucio　カイラコ郡公務員。
João Lop　マリアナ県土木部公務員。
João Renato　マリアナ県農業部公務員。
Francisco Xavier　元マリアナ県議会議長。
Manuel Gomes　マリアナ警察署警察官。
João Afonso　マリアナ警察署警察官。
Adelino　マリアナ警察署警察官。
Bonifacio　マリアナ県リタボウ村、農業従事者。
Marcos　マリアナ県オドマウ村、農業従事者。
Jose Andrade　マリアナの小学校教師。
Anacleto　マリアナ県公務員。
Abel Maia　バリボ郡公務員。
Oscar da Silva　バリボ郡議会議員。
Lourenco Fatima　カイラコ郡の教師。
Apolinario　マリアナ県ラホメア村、農業従事者。

第8章　捕えられた者たちの証言

報告書には付録として捕えられた者たちの筆記による証言が付されている。コピーがひどいため判読できないものもあるが、以下にそれぞれの証言の抄訳をのせる。

（1）Domingos Pereira　（２３歳、男）

わたしは１９９０年１１月３日、夜１１時２０分、おばの家で逮捕されました。その夜、彼らはおばの家のドアをこわして入って来て、非人間的にわたしを殴打しました。彼らが殴打するのに使った道具は、鉄棒、かなてこ、棒などです。その夜、彼らはわたしをセノパティ１番という秘密の尋問所に連れていき、ひどい目にあわせました。彼らはわたしを殴打しつづけ、わたしの顔と鼻はめちゃめちゃになりました。血

が大量に出て顔中血だらけになりました。その夜、彼らはわたしを車の中になげいれ、地方警察署（Polres）に連れて行きました。車の中でもなぐられつづけ、わたしは気を失ってしまいました。

地方警察署に着いたとき、はじめどこに着いたのかわたしはわかりませんでした。彼らはわたしを監獄に入れました。彼らはわたしの首をわたしのズボンのベルトでしばり、わたしの体を引っぱって行きました。そのときわたしは意識がなくほとんど死にかけており、歩けなかったからです。わたしの体は血だらけでした。

１１月４日、夜１１時、わたしは地方警察署の監獄から出され、スノパティ通り２番にある司令部に連れて行かれ、そこで尋問を受けました。尋問は次のように行われました。

＜問＞どうして治安職員にひっぱられたのかね。
＜答＞わたしがどういうまちがいを犯したのかわかりません。
＜問＞自分のまちがいを知らないはずはないだろう。つかまったということは、何かまちがったことをしたということだ。デモに参加したのかね。
＜答＞はい、デモに参加しました。
＜問＞すでに何回デモに参加したんだ。
＜答＞５回です。
＜問＞どこでだ。
＜答＞１９８９年１０月１２日、タシトルで、ヨハネス教皇が来たときと、１９９０年1月１７、１８、１９日、ホテル・トゥーリスモでと、１９９０年9月４日、レシデレでです。
＜問＞そいつが大変なことなんだよ。どうしてデモなんかに参加したんだ。目的は何なんだ。
＜答＞目的は独立するためです。インドネシアの下、紅白旗（インドネシアの国旗）の下にいたくないんです。
＜問＞独立だなんて。何ていう国なんだ。旗はどんな旗だ。
＜答＞独立の権利を要求してるんです。わたしの国は東チモールで、旗は赤、黄色、黒、そして真ん中に星があるんです。
＜問＞どこでそんな旗の色を知ったんだ。
＜答＞森にいた１８歳のころ、知りました。
＜問＞その旗の色の意味は知っているか。
＜答＞ええ、知っています。
＜問＞説明してみたまえ。
＜答＞赤は父、祖父からの血を意味します。１９７５年彼らは血を流しました。そして彼らの血はオイクシからジャコ島まで流れました。わたしたちはそれを覚えているから、独立のために闘っているんです。黄色は、東チモールがポルトガルと日本の占領を受けたという意味です。黒は、すでに血を流したけれどもまだ闇の中にいるということ、つまりまだ世界の多くがこの血を流した東チモールを知らないでいるということです。しかし神はこの闇に星を来たらしめて照らしだし、そうすればすべての国が東チモールを知ってその独立を支援してく

れるという意味です。

まだたくさんあるのですが、重要なところだけにします。その後わたしは地方警察署に帰りました。わたしは8日間セノパティ2尋問所にいて、監獄にもどることができませんでした。というのは足に重傷を負い、胸部をわるくしていたくらです。11月12日には地方警察署の監獄に戻りました。監獄にいる間、食べ物も飲み物も少ししか与えられませんでした。

（2）Boby Xavier Luis Pereira （16歳、男）

わたしは9月27日逮捕され、10月6日釈放、10月8日再び逮捕され、12月9日釈放されました。現在自由の身ですが、治安職員に追われています。マタドウロの自宅でつかまったとき、彼らは鉄（棒？）でわたしをなぐり、空中に向けて一発、わたしめがけて一発、銃を発射しました。しかしわたしにはあたりませんでした。つかまっていたとき、次のような尋問を受けました。

<問>どうして隠れていたんだ。
<答>治安職員に追われていたからです。
<問>どうして追われていたんだ。
<答>どこがまちがっているのかわかりません。
<問>もう何回デモに参加したのかね。
<答>5回です。
<問>いつといつかね。
<答>1989年10月12日、タシトル。1990年1月17、18日にはホテル・トゥーリスモ。9月4日にはレシデレです。
<問>目的は何かね。
<答>独立要求です。
<問>独立して、何という国になるのかね。
<答>わたしの国は東チモールです。インドネシアの紅白旗の下にいたくはありません。
<問>君にデモへの参加を促したのは誰かね。
<答>そんな人いません。自分の意思で参加しました。わたしは東チモール人ですから。わたしの父は東チモールを守るために死にましたが、わたしは父の闘いを継続しなければならないのです。
<問>どういう横断幕をかかげたのかね。
<答>わたしの横断幕は「正義を！」（JUSTICE）というものでした。

そのあと、わたしは地方警察署に連れていかれ、拷問をうけました。またその後コマルカ（刑務所？）に連れていかれ、そこでも拷問を受けました。

（3）Francisco Nascimento （20歳、男）

わたしは9月4日に警察につかまり、血がでるまで乱暴されました。顔ははれあがり、病気にかかってしまいました。わたしがつかまったのは9月4日にデモに参加したからです。警察にいたとき、彼らは、おまえたちはいったい何のためにデモなんか

するんだ、チモールを助けてくれる国なんてあるものか、インドネシアに反対する国なんてないのさ、と言いました。わたしは9月8日に釈放されました。しかし軍と警察は今でもわたしを脅迫し、調べにくることがあります。

（4）Calistro Gudinho　（18歳、男）

わたしは10月28日に捕えられ、12月15日に釈放されました。尋問を受ける前、電気ショックの拷問をインドネシア軍から受けました。わたしのケースは政治活動に関与したことですが、軍側は刑事犯として考えています。秘密警察の仕事を手伝うよう強制されました。

（5）Pedro da Costa Lemorai　（19歳、男）

わたしは司祭の助手をしていますが、1990年11月18日、夜11時ごろ、インドネシアの警察が司祭宅を襲撃してきたとき、なぐられました。

（6）Caitano Martinus　（22歳、男）

わたしは高校生ですが、政治、とりわけデモに関わったとして治安当局の追及を受けています。現在ディリのバチカンの庇護下にあります。

第9章　9、10月のディリの状況

1989年の教皇訪問時以来、東チモールでは多くの東チモール人が逮捕、殺害されている。インドネシア軍の秘密警察は実に巧妙な方法でそれを行っている。夜になるとテロが横行し、パニックになる。それは軍の秘密警察が集めた「ニンジャ」たちが突然現われて、独立運動に関わる若者たちを手あたりしだいに襲うからである。さらには、秘密警察は私服を着て、一般の人々の中にまじり、好機をつかんではさわぎを起こすということをしている。

例えば、9月28日、ベコラの市場に2人の私服を着た秘密警察員があらわれて、無料だからと言って住民をバスに乗せていった。途中で乗った住民は、ベコラの高校生や若者たちを口汚いことばで挑発することを強制された。その結果、石の投げ合いがはじまり、大騒ぎとなった。そして多くの人が逮捕され、投獄された。そして奇妙なことに、捕えられた人たちは殴打され拷問されたあと、事件についてではなく、政治的な問題、例えば、フレテリンの地下組織はいくつあるか、フレテリンのメンバーかどうか、誰が指導者なのか、若者たちが行ったデモに参加したか、シャナナはどこにいるのかなどと質問されたのである。そして知らないと答えると拷問されるのだった。中にはその場、あるいはタシトルに連れていかれて殺された者もいる。

若者たちの活動の活発化に対抗して、インドネシア当局は、東チモールの地方的名士を集めて若者たちの活動調査、弾圧を呼びかける声明文に署名させた。10月25

日付けの声明文には３９名の東チモール人が名を連ねている。

９月のはじめ、インドネシア軍はファリンティル（東チモール民族解放軍）掃討のための大規模な作戦をアイナロ、サメで展開した。動員された大隊は、第７４１、７４３、７４４、７４５大隊など約１３大隊で、海軍や空軍、そしてレッド・ベレー部隊も投入された。この作戦においてインドネシア軍は戦車、ヘリコプター、戦闘機などを使用した。１０月１０日、１０時ごろ、インドネシア軍はファリンティルのキャンプを発見し、ビデオ・レコーダー１個、タイプライター１台、フレテリンの旗２枚、衣服、食糧などを押収した。１０月１４日には、インドネシア軍は多くの書類をもっていた書類保持者を発見し、２つの村（ソロ、スル・クライク）の住民の写真をいく枚か押収した。軍事作戦は１９９１年１月現在でも進行中で、軍はソロ、スル・クライク、マナラウ（アイレウ）に集中している。

９月２８日には、モタエル教会で政治的な動機があると思われる奇妙な事件がおこった。その日の朝６時ごろ、教会が開けられるとイスラム教徒の秘密警察員が、教会番の目を盗んで礼拝堂に向かい、その鍵を盗み家に持ち帰った。そして８時ごろ、ミサのため信者たちが教会に集まりはじめたとき、またさきほどの泥棒が教会にはいってきた。今度は彼は狂者をよそおって聖母マリア像のある祭壇に近寄り、その像を信者の前に投げようとした。すぐに教会番によって取り押さえられたが、怒った信者たちによって彼はこてんぱんに殴られた。

その時、秘密警察が現われたため、信者たちは騒ぎだし混乱した。警察はその泥棒を弁護し署に連れ去った。数人が怪我をし、逮捕されたものもいた。そしていつものごとく警察は政治的なことを問いただした。例えば、「諸君はイスラムの人たちを尊敬していない。なぐったりすると宗教間のいさかいにつながるぞ」「デモや騒動をすれば独立できるとでも思っているのか。そんなことはありえない。国軍はそんなことは許さない。やりたきゃやるがいい」などと言ったのである。

ディリからの信頼できる筋の情報によると、インドネシア軍・秘密警察は１９９０年１０月３日から、東チモール人の協力者をえて独立運動家を消す計画に着手したらしい。そのためにすでにジャカルタからテロの訓練を受けた２大隊が送り込まれたという。すでに従来からテロは存在したが、その規模、形式からみて、今回のものは重大な意味をもつ。テロの強化はデモなどの活発化に対応するため、そして人々を守りつづけてきた教会に対するためのものである。夜８時以降街頭にたむろしている者は攻撃の対象になる。彼らはハードトップ、ジープ、キジャン（トヨタ製）、オートバイなどを使う。襲撃の対象としてベロ司教なども含まれているだろう。

１０月８日、ディリのファトゥメタ第四中学校で生徒とインドネシア軍との衝突があった。いきさつは次の通りである。

学校では毎週火曜日朝、インドネシア国旗の掲揚があり、その後朝礼がなされなければならない。ファトゥメタ第四中学校で国旗掲揚と朝礼がちゃんと行われているか

どうか、ディリ検察長官のバフティアル・ガニ（法学士）という人が見にきた。インドネシア当局はポルトガルの議員団訪問にそなえて抵抗運動を一掃しようとしているが、若者たちもその対象になっている。そのため併合過程を無視するような教育キャンペーンが大々的に展開されている。

バフティアル・ガニはその日、そうしたキャンペーンを同中学校で始めるにあたり、インドネシアに対して東チモールは文句を言える筋ではないことを強調した。なぜなら、インドネシアが来たとき、東チモールはとても貧しく、着るものもなく、だから洗濯することを知らなかった。またキャッサバを食べ、米を知らなかった。人々は愚かだった。インドネシアが料理を教え、道路や家をつくるなど開発を進めてきた。教会はイエスの教えを忠実に教えず、マルクス・レーニン主義を教えていた。だからフレテリンができたのだ。インドネシアは若者たちを正しい方向に向けてやるのだ。

このディリ検察長官の話に対して、生徒たちは平和的な解決をめざして校長と会い、上の発言の訂正を求めた。このような発言はインドネシアの策略を隠すためのものであって、真実ではないからである。しかし話し合いはこじれ、生徒は校長を殴ってしまった。

事態を聞いたバフティアル・ガニ氏は車でその場を逃げ去ろうとしたが、生徒たちが車の行く手をはばんで彼に発言の説明をもとめた。そこに武装した軍隊がやってきて学校を襲撃しようとしたが、騒ぎを見ようと多くの群衆が集まっていたため、彼らも手が出せなかった。集まった軍は第７４４大隊、治安作戦部隊などであった。結果的に、軍は４名の生徒を捕えて連れて言った。

その後生徒たちは仲間の安否をきづかい、赤十字や司教代理の助けによって仲間の釈放を求めた。

１０月９日、授業が始まる朝７時半ごろ、前日よりも多くの軍隊が同中学校を包囲していた。８時半、軍は突然すべての生徒をひとつの教室に集め、昨日の行動が誤っていたと宣言するよう求めた。生徒側はそのようなことは死んでもいやだと言った。軍は生徒たちを殴ぐったり蹴ったりした他、発砲もした。やってきた他の市民に対しても同じことをやりだした。民衆も抵抗して、衝突が学校の外にも広がり３時間も続いた。その結果、インドネシア人兵士がひとり重傷、東チモール人若者がひとり負傷、３人が連行された。１１時、生徒たちは教会に逃げ、司教代理と赤十字にとりなしを求めた。

１０月１０日、朝８時、インドネシア空・海軍部隊が北側から、機動部隊と警察が東および南から、第７４４大隊が西から学校を襲撃してきた。軍は盾、警棒などをもって生徒たちに対抗し、生徒たちは住民に呼びかけて抵抗を続けた。そのうち軍は空にむけて発砲し始めた。発砲は生徒めがけても行われたが幸い命中しなかった。生徒たちは、彼らの死をも恐れない果敢な態度に軍が一瞬ひるんだすきに、包囲を突破して逃げた。生徒たちは赤十字のとりなしを３回も頼んだが、赤十字は何もしなかった。ただ撃たれて死んだ人と負傷者の手当をしただけだった。司教代理はとりなしをしようとしたが、インドネシア軍の暴力にあっただけだった。生徒たちは４人の代表を選んで知事に訴えにいった。知事は翌日８時に会う約束をしてくれた。

１０月１１日、朝８時１５分、知事と生徒の会見には地方軍司令部（Korem）司令官とディリ県長も立ち会った。生徒たちは３日間のできごと、とくに軍のやり方に対して抗議した。軍は夜になると、暗いところをひとりで通っている若者を襲う。生徒たちは軍が若者を襲っている場面を隠し取りした写真を提示した。バフティアル・ガニ・ディリ検察長官の発言がこの間の騒ぎの原因だったということを知事も認めた。知事はよきカトリック信者であり、若者たちの気持ちをよく理解した。

（終）